

2014.12.15

No.186

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送6号分1,000円)



## 2014年をふり返って



12.9 早朝の冬景色

今年も残りわずかになりました。みなさまはどんな1年だったでしょうか？

私は2月に「沖縄パネル展軍隊は女性を守らない」の実行委員としてささやかな運営の一端を担いました。自然保護や、反原発の運動には長く関わってきましたが、慰安婦問題に関わったのは、初めてでした。このイベントを通して、たくさんの女性と繋がることができ、個人的なことも打ち解けて話すことができました。

前号で、元朝日新聞記者の植村さんが「従軍慰安婦」問題について20数年前に書いた記事で、脅迫されていることについて書きました。安倍総理になってから、市民の自由が脅かされています。在特会のヘイトスピーチは、ネット上にも飛び交っていますし週刊誌の見出しには「売国奴」「国賊」「日本から出ていけ」などの言葉が氾濫しています。安倍総理がネット右翼を野放しにして排外主義や歴史修正主義を勢いづけているのは許せません。先日「ヘイトスピーチは差別」と最高裁で判決が出たのは良かったですが、一気にヘイトスピーチがなくなる状況ではありません。

私自身もアウシュビッツ報告会をした時に、参加していた在特会の青年から、私の話をさえぎって「骨も灰も出ていない。110万人以上殺されたという

証拠はどこにある、あるなら証明しろ！」と言われて一瞬何を言っているのか呆然としました。彼はネットだけの知識だけで、歴史の事実を知ろうとしていません。参加していた多数の人たちが冷静に対応してくださいましたが、従軍慰安婦を否定したり、アウシュビッツはなかったとするなど時代が逆戻りしているように感じます。ものが言えなくなる社会は怖いです。

10月31日、元長崎市長の本島等さんが亡くなりました。82歳でした。24年前、「天皇の戦争責任はある」と発言したことによって襲撃された事件を思い出しました。生きていらしたら、「言論の自由を守るためにマケルナ！」と応援して下さいました。

当時の銀河通信18号で「テロは許さない」との見出しで「言いたいことが自由に発言できなくなるのではないかと心配です。民主主義が守られる世の中であって欲しい」と書き、本島市長に励ましの手紙を出しました。思いがけず丁寧ご返事を頂き22号に紹介。そこには「長崎市の市長として核兵器の廃絶、世界平和の実現、日本の民主主義の確立のために努力したいと思います」と記されていました。

今年は言論の自由や民主主義を守る運動にも積極的に関わった年でした。

落合恵子さんが高木基金だよりに「人生は動詞だ」と異議申し立てをし続けると決意を書きました。また亡き筑紫哲也さんが、陶芸家の河井寛次

郎さんが信条にされていた「手考足思」を大事にされていたと知りました。私もおおふたりに学び、人に会い手で考え伝えたいと思います。



## 大飯差し止め控訴審に 全国の原発訴訟原告らが結集しました

11月5日 大飯原発訴訟の控訴審が金沢であり、泊原発の廃炉をめざす会から参加しました。名古屋高裁金沢支部に着いたのは3時少し前で傍聴はできませんでした。30人の傍聴席に対して160人の原告や支援者が並んだことを知りました。報告集会の会場には各地の原発訴訟団の幟10本以上が掲げられ、廃炉の会の幟もあり、連帯の意思を示すことができ嬉しかったです。参加団体は大飯訴訟団の他に、玄海（原告団と弁護団）、大阪大飯訴訟団、東海、浜岡、川内、志賀、泊の8団体でした。玄海原発訴訟の弁護団の方々により模擬法廷が再現

されました。裁判官がいない法廷ですからアドリブもあり、堅苦しくなく裁判がとても身近に感じました。



当会も見習いたいと勉強になりました。

報告集会では、住民側の立場で意見陳述された中嶋哲演代表は「司法の良心を引き継いで欲しい」と訴えました。

その後、場所を移しての交流会では各地での闘いの経過をそれぞれの団体が発言。私も泊原発の廃炉の会の口頭弁論や、市民向けの講演会の企画などについて話しました。また活動を知らせる『ハイロニュース』創刊号から11号分合本は10部を持参しましたが、大飯や玄海などの原告団にとっても喜ばれました。他団体と交流すると、さまざまな運営の仕方を知ることができ、元気づけられました。



翌日は、志賀原発訴訟の原告団長の北野進さんの案内で九州の方と3人で、能登半島の志賀原発を見学しました。志賀町は小さな町ですが、原発公共施設、道路、小中学校も立派でした。高齢者介護施設からは5キロと原発から至近距離です。寝たきりの高齢者が多く逃げられないことを想定して、放射能から防御できるように特殊な建築だそうです。しかし、非常時の避難計画から除外されていると聞き、現代の姥捨て山ではないかと、ショックと怒りを

覚えました。

志賀原発の建設を巡っての説明に、原発は今までの人間関係も壊してしまうことを改めて感じました。事故が起きれば、反対した住民も等しく被害を受けるのです。

全国の原発再稼働は絶対に認められないと意を新たにしています。そのためにも脱原発原告団全国連絡会の役割は今後ますます重要になると思っています。



特別警戒中の志賀原発



能登半島に向かう時、千里浜なぎさドライブウェイを車で通りました。（左写真）砂浜なのに沈まないのにびっくり。この海岸の砂が特別

細かく締まっている（水分を吸って固くなる）ためだそうです。

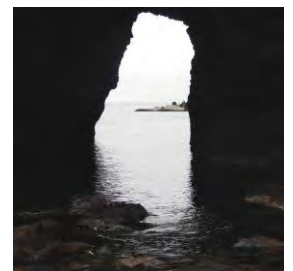
志賀原発反対闘争の拠点であった団結小屋（左下写真）は今もあり、再稼働は許さないぞ！の思



いが伝わってくる看板が印象的でした。

奇岩怪石白砂青松が連なる海岸線は朝鮮半島の金剛海岸に匹敵するということから、能登金剛と呼ばれ能登半島国定公園

に指定されています。能登金剛のヤセの断崖は、松本清張の推理小説「ゼロの焦点」の舞台で、悲劇のヒロインが最後に身を投じた断崖として有名です。巖門（右写真）は日本海の荒波が数千年かけてできた、幅6m、高さ15m、奥行き60mの大きな洞門です。



無数の亀裂が何万年もの昔から現在に至るまで、海底火山の噴火や地震の影響で隆起、もしくは横ずれ、



地層が動いた形跡がありました。（写真上）志賀原発ができる前から周辺の断層が指摘されていましたが稼働後、その事実が証明され再稼働は難しいと言われていたと北野

さんは説明してくださいました。鼓をイメージした「鼓門」（上写真）の金沢駅で、志賀原発視察の旅を終えました。

## 上野千鶴子 憲法を語る もう一度、「平和」を選び直す



ジェンダー研究の第一人者である上野千鶴子さんのお話を10月16日に聴きました。200人を超える人で盛会でした。印象に残ったことを書きとめます。

憲法の三原則は・国民主権・平和主義・基

本的な人権です。そのうちの平和主義は、第二次世界大戦で多くの犠牲を払った経験が、もたらしたので

す。ベトナム戦争に反対する米兵を、日本の市民団体が支援し、脱走させたことがありました。彼らの行動の根っこにあったのは憲法でした。脱走兵は「わが憲法の精神に勝利あれ」と言い、支援者を驚かせました。若者たちが国家に反逆するという自分たちの行動を正当化したことにより、アメリカでは、10代の若者にきちんと憲法教育が浸透していたことを証明したのです。小田実もまた「私たちは日本国憲法の精神に従って行動してきた」と語ったと上野さんは紹介しました。

「憲法はいじってはならない」という「護憲派」は、「改憲」勢力に比べると勢いが弱い。「押しつけ」論を乗り越え、今の憲法を自ら選び取る必要がある。それが「選憲」という選択肢です。憲法を自分たちで選ぶということは、主権在民の大切な契機の一つですと主張しました。

女性学という分野が学会でまったく認められていなかった時代から「女性学は運動だ」という思いで自ら闘い続け、成果を認めさせてきた上野さんだからこそその選憲論でした。

今まで9条があったから、人を殺さず、殺されずにきました。そこはいじらないとしても、どこかをいじれば憲法はいつでも変えられてしまう危険性はないのでしょうか？

上野さんは「本当に大切なものは何か？ 私たちは幸福になるために生まれてきた。安心して弱者になれる社会を！」と結びました。

格差社会は広がるばかりです。障がい者、高齢者、女性、誰もが安心して暮らせる社会であって欲しいですね。私たちはどんな憲法を望むのか、どんな社会を作りたいのかを考える機会になりました。

上野さんはNPO法人WAN（ウイメンズ・アクション・ネットワーク）代表。著書に「スカートの下の劇場」「家父長制と資本制」「ナショナリズムとジェンダー」「おひとりさまの老後」など多数。

今回の講演の概要は集英社新書「上野千鶴子の選憲論」に詳しい。こちらの著書もお勧めです。

## 残念！ミニシアター「蠍座」が 12月30日閉館



札幌駅から徒歩3分の蠍座が2014年12月30日をもって閉館することが、蠍座が毎月発行する「蠍座通信」で知りました。

ビルの地下1Fに、1996年6月オープン。55席の規模で、北海道唯一の名画

座として3本立てのプログラムで上映を続けてきました。

「蠍座通信」最終号の文章のなかで、館主の田中次郎さんは「館主の強い好みを反映した映画を数多くかけつけてここまでこれたのは、奇跡みたいなものです」「わたしにあともう少し経営能力がそなわっていたらもっと上手にやれたはずなのに、なさけないことですがうまくいきませんでした」と、18年6ヵ月間の営業の幕を閉じることを発表しました。

一つ前の「蠍座通信」には「初めた当時といまと比べて著しい変化は観客の年齢層の変わりようです。20代、30代の観客層が驚くべき勢いで減少しました」「90年代末頃までは、蠍座の夜の会は北大生の溜まり場状態だった」とあります。一方でフィルムからデジタル化の流れも追い打ちをかけたようです。デジタルデータを写す機械が500万から1000万というのですから、小さな映画館は、大変な負担を強いられ維持するのも大変だったと思います。

私も10年位は足しげく通いました。良質な映画が低料金で鑑賞できるのが魅力でした。話題になった映画も、1ヵ月後位に観ることができました。数多くの映画は「銀河通信」でも紹介してきたので過去の通信を読んで頂けたらと思います。

一番印象に残っているのは、新作の『イントゥ・ザ・ワイルド』を別の映画館で観たのが素晴らしくて、新年に蠍座で上映された時に家族と一緒に来たことです。原作は冒険家ジョン・クラカワー著のノンフィクション「荒野へ」。すべてを捨てアラスカへと放浪の旅へ出た裕福で、学業も優秀だった青年の心の軌跡を描いた人間ドラマでした。

「蠍座通信」の最後に田中さんは「お客さんにはありがとうを、自身の意地にはご苦労さんをおしまいにしようと思います。淡々と笑顔で閉館します」と締めくくっています。

12月16日（火）から最終日の30日（火）までは、「蠍座思い出の1本」としてセレクトされた小林政広監督の『愛の予感』、ダルデンヌ兄弟の『ロゼッタ』、中村高寛監督の『ヨコハマメリー』の3作のほか、『マイ・ブラザー 哀しみの銃弾』『ある過去の行方』『友よ、さらばと言おう』が上映されます。映画好きな方は、どうぞ蠍座に足を運んでいただけたらと思います。超満員で、田中さんに感謝の気持ちを伝えられたらいいですね。



## 北海道高山植物保護ネット 市民フォーラムに参加して

11月29日、北海道高山植物保護ネットの市民フォーラムが開かれました。

今回は写真家の梅沢俊さんのヒマラヤのスライドの紹介、北大の愛甲さんが「山岳地の適正利用は実現でき

るか？」と題する講演や大学院生の研究発表がありました。梅沢人気で160人の参加で大成功でした。

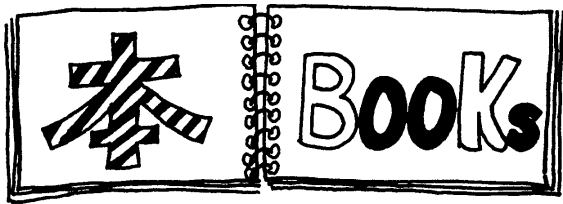
1998年に高山植物の盗掘から守ろうと、全道各地の山岳団体、市民団体の50団体がネットワークを作

りました。今年で16年目。私は発足時から事務局で各地の団体の連絡役をしていました。その後は5年間事務局長をしました。2010年に「北海道高山植物保護ネット」と改称して、ようやく事務局から降りました。



高山植物の盗掘のみならず、オーバーユース問題や外来種、エゾシカの増加、温暖化などにも取り組むネットワークとして活動しています。

私は一応山岳会の会員ですが、立ち上げの時から関わっている保護ネットは全道各地で、山の自然を守る活動をしている仲間と1年に一度お目にかかる同窓会のような存在です。



本は常に読んではいませんが、気忙しくて読者の皆さんに伝わるような文章は書けません。どうぞ書店で購入して読んでいただけますようお願いします。



### 天人 深代惇郎と新聞の時代

後藤正治著  
講談社 1800円＋税

「天声人語」とは「天に声あり、人をして語らしむ」という故事からつけられた名前です。1904年から掲載が始まったといえますから110年の歴史を誇ります。

「天人」と呼ばれる「天声人語」の書き手はたくさんいますが、今でも人気が高いのは、この本で取り上げられている深代惇郎（じゅんろう）さんでした。私も名前に記憶があります。しかし、私の世代では長く「天声人語」を担当した辰野和夫さんに親しみがあります。

深代さんが「天声人語」を担当したのは1973年2月15日から75年11月1日までの2年9ヵ月。歴代の「天人」の執筆期間と比べて短い。

それでも人気が高いのは、深代さんの文章に品格があったと著者は述べています。それにしても46歳の若さで亡くなったのが惜しまれます。

この本を読むと当時、キラ星のように、自由闊達な記者群像が描かれていて、互いに刺激しあって力のある記事を書けた時代だったことを彷彿とさせます。でも従軍慰安婦問題での対応が遅れてからのパッシングは異常だと感じます。吉田証言の間違いは訂正したのだから、何の非もない元朝日記者を擁護する記事を書いて欲しかったです。ジャーナリズムをリードしてきた朝日新聞ではありませんか？

本書は新聞のありかた、新聞人のありかたを問うています。「人間のもつ弱さや愚かさや挫折を噛み締めたことのないものがどうして人の心に届くものを書けようか」と、著者は書きます。

新聞人がいつのまにか高慢になって、自分の声を「天の声」と誤解しているのではないだろうか。

深代さんはかつて「天声人語」の中でこう書きました。「民の言葉を天の声とせよ、というのが先人の心であったが、その至らざるの嘆きはつきない」。

著者は、近年元気がない新聞に言葉の力をもう一度かみしめ、信頼を取り戻して欲しいとの思いで本書を書いたと言います。ネットに押されて、若い世代の活字離れが進んでいますが、活字から記者の思いは伝わってくるはず。力のある言葉に出会いたいものです。

### 非除染地帯

ルポ3.11後の森と川と海

平田剛士著  
緑風出版 1800円＋税

東京電力福島第一原子力発電所の事故から3年半がたちました。

本書は、除染対象から外れた「非除染地帯」の生態系がどうなっているかを追ったルポルタージュです。放射能が森や海や里に何をもたらしたか、そこに暮らす野生動物や人間社会にどのような影響をもたらしつつあるのか。著者はイノシシを狩る猟師や鮭のふ化場、鮎のセシウム濃度を調査する研究所、福島沖の魚類を調べる水産試験場、アブラムシを調査する研究者、メダカを調査する市博物館、川内村のモリアオガエル観察会などを訪れて、取材を重ねました。

人がいなくなり、田畑や山が手入れされなくなると、害獣の活動範囲が広がりました。加えて、猟師たちが地元を去り、狩猟離れが進んだこともあり。猟師が撃ったイノシシは食べられなくなり、出荷も不可能になったのです。山人文化研究者の第一人者として知られる田口洋美さんは「大地を放射能に汚され、農地に手が入らなくなると動植物の侵入をゆるし、それを抑止する力も弱まり、共存バランスがとめどなく崩れていく・・・しかもこれから始まろうとしているのは新しい負の連鎖です」と語っています。ドキュメンタリー「福島 生きものの物語」でも警告していましたが、これからどんな異変が起きるのか！静かに告発しています。





**動かすな、原発。**  
大飯原発地裁判決からの出発

小出裕章・海渡雄一・島田広・  
中島哲演・河井弘之  
岩波ブックレット 520円+税

2014年5月21日、福井地方裁判所で、樋口英明裁判長は、大飯原発3、4号機の運転差し止めを命じた判決を言い渡しました。

「原発銀座」と称される福井県で、原発の危険性を訴えてきた原告と弁護団の声を紹介し、画期的内容を多く含む判決内容と影響を分析したのが本書です。

弁護士の島田広さんは、訴訟の具体的な経過を紹介。「なぜ勝てたのか？」に「福島の実況、当事者双方に率直に疑問をぶつけて真実を見極める裁判官の真摯な姿勢、まともに質問に答えない関西電力の不誠実な態度が、今回の判決が出された大きな原因だと考えている」と述べています。裁判長はわからないことを当事者に質問することに躊躇しなかったとも。そんなの当たり前じゃないのと思うかもしれないが、多くの裁判官は「王様は裸だ」という勇気がなかったのです。それに対し、勇気をもって「王様は裸だ」といい、住民生命と安全を守るために、市民と世界の常識に立ち返って判断したのが今回の判決だったと述べています。原告団長の中島哲演さんは、小浜市民が半世紀近くにわたって、小浜原発誘致を三度、使用済み核燃料中間貯蔵施設の誘致を二度にわたって阻止しつづけてきたことを書いています。気の遠くなるような市民運動の継続に頭が下がります。

格調高い判決要旨を解説付きで全文収録しています。反原発運動を各地で頑張っている人たちに是非読んでいただきたいです。



**悪童日記・ふたりの証拠・第三の嘘**

アゴタ・クリストフ著  
堀茂樹訳ハヤカワ文庫  
660～680円+税

作者アゴタ・クリストフは1935年ハンガリー生まれ。『悪童日記』は、場所・時代・登場人物の名などを外して書かれています。戦争末期のハンガリーで、双子の兄弟が祖母のもとに疎開し、過酷な状況の中、二人で力と知恵を合わせて、生き延びるためにあらゆることをします。二人は目にした事実を淡々とノートに書き記します。感情を排した簡素な文章です。

第二作『ふたりの証拠』で双子の名前が明かされます。前作で双子の一人クラウドは地雷が埋まる国境を越えますが、残ったリュカは家で一人暮らしを続けます。偶然な出会いから不具の子を育てるリュカの青年期の物語です。

第三作『第三の嘘』は、50歳を超えたリュカがクラウドを探し、精神障害となった母と暮らすク

ラスの物語です。

3部作が時代に翻弄された双子の少年の物語であるという続きものでありながら、それぞれの構成も内容も違うことに、驚かされます。主人公や登場人物が同じであるのに同じでない。文体が共通しているのに全く違う。連続する話なのに辻褄が合いません。記者の堀茂樹さんはあとがきで「事実性や具体性へと作品を還元するより、この作家の抑制の効いた単純無比な表現の中に、強固に自立した精神の証をみるべきである」と書いています。

虐げられた状況下で人はいかに生き、そして死んでいったか。離れた地でそれぞれの人生を歩んだ兄弟の再会で明かされる真実と嘘。独特の文体に引き込まれて一気に読みました。

作家の佐藤亜紀さんが著者にインタビューしています。「クリストフは、亡命とは一人の人間がふたつに引き裂かれるような体験で、体は亡命先にあっても心は国に残っているのだと語った」。

著者の実人生が反映された作品です。母国の言葉を失うことのよりどころのなさほどに辛いものかと考えさせられました。



**1941年。パリの尋ね人**

パトリック・モディアノ著  
白井成雄訳  
作品社 1800円+税

今年のノーベル文学賞はフランスのパトリック・モディアノが受賞しました。対象になった作品は「1941年。パリの尋ね人」でした。

1998年12月発行の94号で本書を紹介しました。当時は手書き。当時のままの文章です。

45年生まれの著者は、自分の生まれる4年前の新聞をめくって「尋ね人広告」に目をとめます。尋ね人は15歳の少女。10年の歳月をかけて少女を探すノンフィクションです。少女の両親はパリに流れ着いたユダヤ人で一家は隠れるように暮らしていたことが分かります。同時期、ユダヤ人であった著者の父も警察の手から逃れて生き延びます。あの時代のパリの暗い空気を伝えます。感情を入れない淡々と事実を書いていながら、夜のパリを逃げ惑う少女の足音や悲鳴が聞こえてくるようでした。行方不明になった数ヶ月、どんな日々を過ごしたのか分からない。しかし1942年9月少女と父親は「他の4人と一緒にアウシュビッツ行きの列車に乗せられた」。この事実には私は涙をこらえることができませんでした。本書は悲惨な歴史を記憶し続けることを静かに伝えていきます。

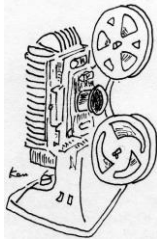
朝日新聞の連載「七つの村の記憶」でフランスのルシャンボンという小さな村で、ナチスの迫害から逃げ惑うユダヤ人の子どもたちが匿われたという記事がありました。村の記憶は長い間語られることがなかったという。歴史の事実を知ること、かけがえのない平和を守りとおすことができ

## 6歳のボクが、大人になるまで。

米・リチャード・リンクレイター監督



6歳の少年メイソンが大学に入るまでの12年間を、離婚した両親



や姉、それぞれの生の軌跡も織り交ぜて綴ります。他の家族も同じ俳優です。

キャリアアップのために大学に入学した母に伴われてヒューストンに転居し、その地で多感な思春期を過ごす。アラスカから戻って来た父との再会や、母の再婚、義父の暴力、初恋などを経験し、大人になっていくメイソンは、やがてアート写真家という将来の夢を見つけ、母親のもとを巣立つまでが描かれます。

12年という年月の中で母は大学教員になり、ミュージシャンを目指していた父も就職し、再婚して新たな子が生まれるなど、家族にも変化が起こります。

両親に振り回されて、理不尽な思いをしたり、喪失や孤独、初恋といった感情を知っていくメイソン。そのささやかな瞬間の積み重ねを母親の目でみつめている私でした。メイソンを演じたエラー・コルトレーンの繊細で、豊かな感受性がステキで、頑張り屋の母（のパトリシア・アークエット）にも共感しました。

12年もの長い間、撮影していくのですから予測できないこともたくさんあったと思います。少年から青年に変貌し、顔つきも心も精悍になっていきます。でもナイーブな部分は全く変わらなくて、「少年の心」は永遠なんだなあとまるで現実を生きているように思えました。

自立していくメイソンと、母の心情が手に取るように伝わってきて、何か特別な事件があるわけではないのに、人生をしみじみと考えさせ余韻が残りました。



## 悪童日記

ドイツ・ハンガリー  
ヤーノシュ・サース監督

小説「悪童日記」が初めて映画化されました。第2次大戦末期のハンガリーを舞台に、混乱の中を生きる人間の姿を双子兄弟の視点で描いています。

両親と別れ、都会から母の実家に疎開する双子の兄弟は、父の言いつけ守り、見聞きした事実を日記に書き続けます。大人の醜さ、哀しさ、世の不条理を目の当たりにしながら、悪事も働き生き抜きます。

ハンガリーは異なる民族の支配下に置かれていました。ナチス・ドイツの兵士が行きかい、ソ連兵もいます。過酷な時代であることが映画から伝わってきました。

美しい双子と、残酷なまでの悪事が結びつかないのですが、当時の混乱した状況が、複雑に絡み合っています。兄弟もまた、相反する矛盾を抱える人間に育つ

ていきます。一つの価値観が絶対ではないことがこの映画の根底に流れているようです。

道徳観をひっくり返されるような衝撃を受けました。5pで「悪童日記」3部作を紹介しましたので是非読んで頂けたらと思います。時代背景が理解できます。

## アルゲリッチ 私こそ音楽！

フランス・スイス  
ステファニー・アルゲリッチ監督



世界的ピアニストであるマルタ・アルゲリッチの素顔に迫るドキュメンタリー。三女が監督して話題に。

1941年、アルゼンチンで生まれ、スイスで育ったマルタは、子どもの頃から非凡な才能を発揮し、12歳でウィーンへ留学。16歳にして数日間のうちに2つのコンクールで優勝を飾り、24歳でワルシャワのショパン国際ピアノコンクールで優勝。その後、あらゆる著名オーケストラとの共演を果たし、世界中で演奏活動を行っています。

ステファニー・アルゲリッチが監督を務めてカメラをまわし、天才と言われる母を持つ娘の視点から、知られざるマルタの姿を映し出していきます。

マルタは父親の違う3人の娘がいます。三女はピアニストのスティーブン・コバセビッチとの間に生まれ、ヴィオラ奏者の長女リダは中国人音楽家を父に持ちます。ジャーナリストの次女、アンニは指揮者デュトワを父に持ちます。

三女は幼い頃から、ツアーに同行し、母の練習するピアノが子守唄代わりだったという。母と暮らしたことのない長女。母の代わりに妹の面倒を見た次女。それぞれが母を語ります。

俗世間とは無縁の世界に生きたアルゲリッチを「大人になりきれない迷子」とステファニーは評します。奔放な私生活からは想像がつかないほどマルタの素顔はチャーミングでした。「私は誰のものにもなりたくなかった。誰かの娘にも誰かの恋人にも」と語ります。その言葉は「誰のものでもない！」と叫んだウーマンリブとは違います。そこが面白いと思いました。

母に振り回された娘たちもすごい！自分の人生を力強く生きている姿は感動的でした。ピアニストとして、素晴らしい演奏を世界中に届けてきた母の偉大な姿を尊敬しているからこそ、娘たちも独自の道を切り開くことが出来たのでしょう。

一番そばで母を見てきたステファニーは「母は何事もユーモアにくるんで楽観的にとらえる」と言います。常識では計り知れませんが、母と娘らが集う場面を見て、温かい気持ちになりました。

随所に挿入されるアルゲリッチの音楽も良かったです。

トークバック沈黙を破る女たち 坂上香監督



サンフランシスコを舞台に、HIV陽性者、薬物依存症患者元受刑者など、社会の周縁にある女性たちが、演劇を通じて封印した過去を語り共有することで、ありのままの自分を回復していく姿を追った、ドキュメンタリーです。8人の女性が辛く苦しい過去を解き放つことで新しい人生の第一歩を踏み出していきます。

HIV陽性者の中には性暴力の被害者も多いと言います。過去や今の自分と向き合い、まして語るとは容易ではありません。そんな女性たちが稽古の際にお互いの経験をシェアし、自己開示の大切さに気づいていきます。また、舞台中に鑑賞者を巻き込んだり、舞台後にセッションを設けたり、鑑賞者が興味本位だけであることを許しません。

HIVやDVなど、凄まじい人生を乗り越えていく彼女たちが、なんと美しく知的なことか！と感動で胸が震えました。「過去があるから今がある。後悔はない」と言い切る女性の言葉が力強い。自らの力で新しい人生を切り開いた女性たちは、同じような病気で苦しむ人たちを勇気づけます。

坂上さんはこの映画を、「自らの過去を恥じ、卑下して前向きになれない人たち、またそういう人々への偏見や攻撃的になっている日本人に、実際に生き直している人の姿を伝えたかった」とあるインタビューで答えています。各地で上映会が開催されて大きな反響を呼んでいます。

マルタのことづけ メキシコ クラウディア・サント＝リュス監督

メキシコの新人女性監督クラウディア・サント＝リュスが自らの体験をもとに孤独な女性が余命わずかなシングルマザー



とその子どもたちとの交流を通して、希望を見出していく姿を描いたヒューマン・ドラマ。

家族も友だちもない孤独な生活を送っていた26歳の女性クラウディアは、ある日、4人の子どものシングルマザーである40代のマルタと、病院で知り合う。マルタの自宅に招かれたクラウディアは、にぎやかで馴れなれしいマルタの家族に戸惑いながらもどこか居心地の良さを感じ、親交を深めていく。やがてクラウディアは、マルタが不治の病におかされていることを知ります。

クラウディア自身が成長していく様をみずみずしく描き出します。子どもたちそれぞれが、個性的なキャラクターを自然体で演じています。

父親が違っていたり、複雑な家族でありながら母の死を静かに受け止める子どもたちがステキです。「私の遺灰は、この町の中にまいてちょうだい」という遺言に思わず泣けました。

何を怖れる フェミニズムを生きた女たち

松井久子監督



1970年代のウーマンリブ運動（女性解放運動）から40数年にわたる

日本のフェミニズムの歴史と、現在も続いているさまざまな女性たちの活動を追った、ドキュメンタリー。男社会から疎まれ、同性からの偏見や誤解の目にさらされても自ら進んで「フェミニスト」と称し戦い続けてきた女性たちの力強い生きかたや活動の軌跡を記録。日本を代表する14人のフェミニストたちが、それぞれの人生を語ります。

闘った女たちも、60代後半から80代になり、回顧の季節を迎えています。彼女たちが生きてきた歴史と人生の厚みを、まだ間に合ううちに記録に刻み、次の世代に手渡したいとの思いから制作されたのが本作です。

全編語りだけの映像、個性の強いフェミニストたちが淡々と放つ言葉に、昔は近寄りたく遠くで眺めていたのに、今では共感できる部分もたくさんあるのに気づきました。

市民運動でも70年代は、まだまだ男性優位でした。民主的な考え方の人でも、自分の妻は家庭にいて欲しいという人が多かったと思います。

結婚して共働きで、仕事と家事、育児をしましたが、どうしても女ばかりが負担が大きいのだろうと悔しかったことを思い出します。夫は民主主義を教える教員です。私は強く家事の分担を主張しました。映画でも、家庭の中で闘った女性の発言があり、「おんなじだ」と共感しました。

一足早く試写会で観ました。札幌上映は2015年4月です。私もチケットの普及をしたいと思います。是非ご覧ください。



映画と同名の本が岩波書店から発売されました。(1400円)

フェミニズムの第一世代として最前線を走り続けた12人が、自らの人生とフェミニズムへの思いを語っています。ドキュメンタリー映画「何を怖れる」に収録しきれなかった

貴重な証言を記録しています。

私が知っている女性は上野千鶴子さんや高里鈴代さんら4人だけです。どなたも個性的で、誰にも従属することなく、闘い生きた軌跡に感動しました。

私が一番惹かれたのは、滝石典子さんの生き方です。子どもを抱えて、ウーマンリブの活動に飛び込み、さまざまな活動の末に高知県の四万十市に移住し、現在の伴侶と知り合い結婚。地域に根をおろして、高齢者を支える活動や、環境保護の問題に取り組んでいる姿でした。



群像舎・岩崎雅典  
監督  
福島第一原子力  
発電所の事故を受  
け、放射性物質に  
さらされた生態系  
に何が起ころうと

しているのか、福島県の生きものたちに焦点をしばり記録。特に人が住まなくなった非除染地帯の動物や家畜やペットに目を向けます。

被曝した牛や、犬、猫、ダチョウ、イノブタの世話をする人の姿がとりわけ印象に残りました。本人も被ばく覚悟でしょう。人間・動物・植物の別なくすべての生命が等しく放射能汚染にさらされていることを淡々と映像は語っていました。

20年後、福島はどうなっているのだろうか？ 物いぬ動物からの告発です。

平田剛土さんの「非除染地帯」を読むと、すさまじい勢いで、生態系の変化が起こっていて、山から民家周辺に降りてきたイノシシやサルの群れに異変が起きる日は遠くないと思わせます。汚染された動物は福島から他の東北にも広がっていくのではと怖くなりました。

報道の自由・学問の自由、大学の自治を考える

## 北星問題の根底にあるもの

日時： 2014年12月20日（土）  
開場 12:30 開会13:20~16:10

場所： 北大学術交流会館講堂（北8西5  
北大正門入って左側）

参加費： 800円 予約不要

講演： 植村隆さん（元朝日新聞記者）  
「屈するわけにはいかない」

山口智美さん（モンタナ州立大学）  
「『慰安婦』問題はなぜ叩かれるのか」

長谷川綾さん（北海道新聞記者）  
「北星問題の経過」

年末の忙しい時期ですが、是非ご参加ください。

## 星の観測を楽しみませんか！



天体観測が趣味の夫が自宅前で星の観測会を開きます。大小合わせて9台の天体望遠鏡が、出番を待っています。夫が自分で鏡を磨いた直径20センチの手作り望遠鏡も使用する予定です。

新年の夜空を眺めてみませんか？ お近くの方はお子さんもどうぞいらしてください。何もお構いはできませんが、ココアで温まってください。

日時：2015年1月1日（木）21:00~23:00  
場所：江別市野幌若葉町  
ガイド：樋口澄生

天候次第で中止になることがあります。当日19:00以降にご連絡をお願いします。  
TEL 090-6870-9225 又は  
メール minginga@agate.plala.or.jp

## あとがき

2月は沖縄展。3月、夫の定年を祝って家族で九州旅行。4月夫は再任用で札幌の別の中学校に異動。楽になるところか、毎晩深夜まで授業の準備は今も続いています。5月大飯原発再稼働差し止め判決に感激！7月、5人でポーランドのアウシュビッツを訪ねる。ホロコーストの残忍さを目の当たりにし、戦争だけは絶対にしてはならないと思う。8月石川県の白山に登る。9月、アウシュビッツ報告会で見てきたことを話す。11月大飯原発控訴審に参加。12月、突然の選挙。自民党の圧勝にますます右傾化が進み、憲法改悪されるのではと不安になりました。

1年間、ご愛読ありがとうございました。来年はみなさまにとっても笑顔があふれる年であって欲しいと願っています。

写真・アンネのバラ  
（三鷹市の嶋崎英治さん）



購読料をありがとうございます（敬称略）  
2014.10.21~12.10

林心平・恭子（札幌市）小野有五（札幌市）熊坂政晃（八王子市）増山和則（札幌市）水尾君尾（夕張市）村田和子（水巻町）宮本尚（札幌市）カンパ含む 梅沢俊・節子（札幌市）切手、カレンダーも助田梨枝子（芽室町）小野純江（練馬区）カンパ含む 坂井京子（旭川市）市川利美（札幌市）書籍合計1,8000円は、印刷と送料に使わせて頂きます。ありがとうございます。